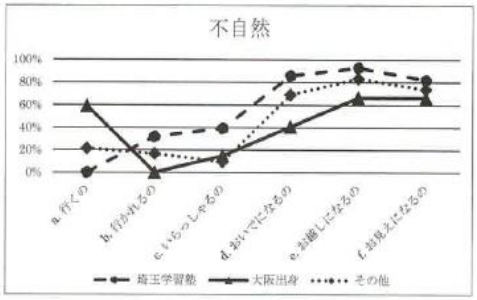
○記入用紙

JWUシーズ

※＝入力必須項目

研究者名※	田邊和子	学位※	筑波大学大学院修士(地域研究) 明海大学大学院博士(応用言語学)
所属※	文学部 日本文学科	職名※	教授
連絡先	tanabeka@fc.jwu.ac.jp		
URL			
researchmap※	https://researchmap.jp/read0196592		
研究分野※	言語学・日本語学		
研究キーワード※	社会言語学・文法・意味・言語生活・日本語史		
共同研究・競争的資金等の研究課題	パラレルコーパスによる多言語教育DDLに向けて(科学研究費・基盤B・研究分担者、2009～2012年) 日英パラレルコーパスによる連帯修飾節対照比較研究(科学研究費・基盤C・研究代表者、2013～2015年) 多言語パラレルコーパスに基づくDDLオープンプラットフォームの構築と教育への応用(科学研究費・基盤B・研究分担者、2013～2016年) 公共用語の地域差・時代差に関する社会言語学的総合研究(科学研究費・基盤B・研究分担者、2016～2019年) 日本の社会構造変化と敬語の簡素化～話題敬語から対者敬語へ～(科学研究費・基盤C・研究代表者、2017～2020年) 敬語の丁寧語化における歴史社会言語学的分析(科学研究費・基盤C・研究代表者、2021～2023年)		
社会貢献・産学官連携活動等			
受賞歴			

研究領域	社会言語学・日本語学・言語生活 ・日本語史	(SDGs)
研究テーマ※	歴史社会言語学的見地からみた敬語の簡素化と明晰化	
概要※ (概ね1000字以内) (写真・グラフ等自由)	【研究の背景・目的・内容】 日本語の敬語法が、話題敬語から対者敬語へと変化していることは、井上(1989) 森山(1997)によって既に指摘されている。これは、江戸時代後期から明治時代20年代において「ます」「です」が丁寧形として成立したこと、さらに、戦後75年を経て民主化が進み、社会の脱階層化(un-stratification)の進行により「いらっしゃる」の衰退とこれに代わって「行かれる」の拡張、「です」の口語体「っす」と「動詞＋です(例:行くです)」の用法の出現などの例を見ても、敬語の簡素化と明晰化が進み、話し手の聞き手への配慮に重点が置かれた「対者敬語」としての丁寧語化が進んでいることがわかる。筆者の研究の目的は、この言語変化を、従来、共時的考察がほとんどであった社会言語学の分野に、通時的視点を採り入れ、歴史社会言語学的見地から分析することである。 【応用例、研究の展望】 右の図は、埼玉県在住・大阪出身・その他の地域の女性(およそ40代～60代)に、各敬語形を聞いて、「不自然」と思うかと質問した結果である。筆者の予想以上に、「行かれる」を自然として、「いらっしゃる」を不自然と答えた割合が多かった。 【研究方法の特色】 研究には、質的・量的分析の併用を試みる混合研究法を採用している。  出典:田邊・小池(202	
本研究関連特許・論文等	Kazuko Tanabe（2019）. The influence of Globalization on Honorific Language Use in Japanese. 明海日本語, 24, 65-74. 田辺和子・小池恵子（2020）. 敬語の簡素化と明晰化. 国文目白, 59, 104-121.	
共同研究・外部機関との連携への期待	・ ・	